

1076 ニフレックによる ^{67}Ga 全身スキャンの前処置
洪 誠秀, 市川今朝登(獨協医大放)

前処置不徹底のため、しばしば ^{67}Ga が大腸内に残存し、 ^{67}Ga 全身スキャンの診断価値を損ねている。簡便でしかも完全な前処置法確立のため、ニフレックの使用を検討した。ニフレックは経口腸管洗浄剤で、大腸内視鏡検査では既にその評価は定まっている。

10例の予備試験の結果は、低残渣食と高圧浣腸を省いても、大腸洗浄効果は全例完璧であった。被験者と看護婦に行なったアンケート調査の結果は、被験者、看護婦共に負担が軽減し、従来法よりも好ましいという評価であった。ただ若年者は洗浄剤の匂いと味に不満を表した。

^{67}Ga 腫瘍炎症スキャンは、陽性だけに意味あるのではなく、積極的な陰性も臨床上重要な意義を持つ。そのためには完璧な前処置が要求され、ニフレックによる前処置の導入は ^{67}Ga 全身スキャンの診断価値を高めると思われる。

1077 ガリウムシンチグラフィにおける脾臓
描出症例の検討

望月隆男, 高橋元一郎, 金子昌生(浜松医大放)
杉山浩一(東静岡病院放) 川合宏彰(静岡済生会病院放)

本研究の目的は、ガリウムシンチグラフィのびまん性脾臓集積上昇はどのような状態に見られるものであるかを知ることである。対象は当院で3年間に検査を受けた210例で背面のプラナー像をretrospectiveに検討した。判定は、脾臓の集積が肝臓と同等か上昇しているものを陽性、低下しているものを陰性とした。結果は、陽性例52.9%、陰性例47.1%であった。陽性所見は肝硬変、サルコイドーシスで高頻度に見られ、またChi-Square検定にて女性・脾腫のある症例に陽性所見が見られる傾向が認められた。脾臓の高集積の機序は不明であるが、鑑別疾患を考える際の助となると思われる。

1078 胸部 ^{201}Tl および ^{67}Ga -SPECTとCTとの
重ね合せ観察法

伊藤敦子, 曾根脩輔, 春日敏夫, 小口和浩(信大放),
矢野今朝人, 五味勉(信大中放)

種々の放射線画像法の中で ^{201}Tl や ^{67}Ga のSPECT像は病巣を感度よく表示して有用であるが、これの解剖学的局在を正確に知ることが困難なことが多い。従って、SPECT像とCTの重ね合せ表示が可能になると診断が容易になると考えられる。今回この目的のため、重ね合せ方法を検討した。対象部位は胸部であり、種々の画像法撮影時の呼吸位相の簡便な補正法を考案した。重ね合せ診断の効果としては、 ^{67}Ga -SPECT像で疑われる炎症巣をCT像で特定でき、CT像の形態変化とよく対比検討できた。また、 ^{201}Tl -SPECTによる肺腫瘍性病巣の良悪性の鑑別や縦隔リンパ節転移の同定などが容易になった。

1079 頭頸部悪性腫瘍における ^{67}Ga SPECTの有用性
西山佳宏, 川崎幸子, 佐藤 功, 大川元臣, 田邊正忠
(香川医大 放), 松野慎介(滝宮総合 放)

頭頸部悪性腫瘍54例に ^{67}Ga シンチグラフィを施行し、悪性リンパ腫群と非悪性リンパ腫群に分け ^{67}Ga SPECTの有用性を検討した。悪性リンパ腫群のプラナー像の陽性率は17/20(85%)、SPECT像では16/17(94%)であった。上咽頭癌・口腔底癌などの非悪性リンパ腫群のプラナー像の陽性率は11/34(32%)、SPECT像は20/27(74%)であった。プラナー像で異常集積と生理的集積部位との鑑別が困難な上咽頭癌などでは、 ^{67}Ga SPECTを追加することで病巣の検出率の向上が期待でき、病巣の広がり指摘可能な場合がある。一方、悪性リンパ腫はプラナー像でもその検出率が高いが、更にSPECTを追加する事により小病変の検出も可能となり、検査時間に余裕があれば追加すべき価値ある検査と考えられた。

1080 骨軟部疾患の診断におけるTlシンチグラフィの有用性の検討
興津茂行, 牛嶋 陽, 奥山智緒, 杉原洋樹, 前田知徳
(京府医大放)

骨軟部組織の良性疾患に対してTlシンチグラフィを行い、臨床診断への有用性を検討した。また、Gaシンチグラフィも施行し、比較検討した。対象は炎症性疾患4例、良性腫瘍5例の計9例である。Tlは111MBq静注し、15分後(早期像)および3時間後(後期像)に撮像した。Gaシンチグラフィは6例に施行した。Tlで良性腫瘍の5例中4例に早期像で集積を認めたが、後期像では全例で集積が減少した。Gaは4例中2例に集積を認めた。炎症性疾患では全例にTlが集積し、内3例は後期像でも集積はほぼ不変であった。Gaは2例に行い、いずれも集積を認めた。Tlシンチグラフィにて、炎症性疾患と悪性腫瘍との鑑別は困難と思われたが、良性腫瘍においては有用性が期待された。

1081 実験腫瘍を用いた化学療法前後における
 ^{201}Tl の集積能の検討

福永浩太郎, 佐々木真弓, 脇丸 孝二, 辻 次郎,
西山 佳宏, 川崎 幸子, 田邊 正忠(香川医大・放)

^{201}Tl の化学療法(ADR)における治療効果判定の有用性を実験腫瘍を用い検討する。

ウィスター系ラットの大腿部に移植したWalker256腫瘍にADR4mg/kgの化学療法を施行した。化学療法前後に ^{201}Tl シンチグラフィを撮像し、腫瘍と対側健常肢のカウント数の比(T/N比)を治療前後で比較した。

ADR投与により腫瘍は消失し、観察期間中腫瘍の再発は認められなかった。ADR投与前後でT/N比にも有意差は認められなかった。

^{201}Tl シンチグラフィによる治療効果判定には ^{201}Tl の集積能に影響を及ぼさない困難な時期が存在すると考えられ、病理組織学的に検討中である。